

## 組閣と憲法起草

### 引越間際の御召

多くの人と同じように、私も戦災に遭つた一人で、前の千駄谷の家も家財も自動車もみな焼けてしまった。そして多摩河畔の家で終戦を迎えた。こうなることは、かねて覚悟はしていたものの、その日／＼の生活が非常に淋しい。そこでいろいろ考えた。もう私も年が年である。どこかへ隠棲して、書物でも読んで、靜かに一生を終りたい。それは幸い山紫水明の鎌倉の家が残っている。よし、そこへ引越そうと決心したが、その頃のこととてトラックを手に入れるのが非常に面倒だ。車もなければ油もない。方々駆け廻ってようやく一台手に入れた。そのトラックが来て、引越しの荷物を積み終ったので、私も支度をして門を出ようとした。そこへ出あいがしらに乗用の自動車 came。それは宮内省の自動車であった。そしてその自動車で「早速御参内相成度」という侍従長からの手紙である。それは何の御用か知らんが、すぐ参内せよというのに、鎌倉へ行ってしまつて、二日も三日も延ばしては、臣下として相済まん。服装などはあの当時何でも構わなかったようだが、幸い鞆の中にモーニングが一着残っていたのを着込んで

で、引越しは延ばすことにして、その車で宮内省へ行った。それは昭和二十年（一九四五年）十月六日であった。

### 寝耳に水の大命

宮内省へ行くと、陛下がお待ちになつておいでになるとのことと、早速拜謁した。陛下は私に、内閣組織の大命をお下しになった。寝耳に水と言おうか。これは全く夢にも予想しなかったことであつて、私には御引請け申上げる自信がなかったから、御勤弁を願つたが、お話申上げているうちにも、いかにも御心痛の御様子が拜察された。事ここに至つてはこの上御心配をかけては相済まない。自分で出来ることなら、生命を投げ出してもやらねばならぬと、堅く心に誓うに至つた。それで、

「幣原にはこの大役が勤まるという自信はございませんけれども、全力を盡して御意を奉じましよう」と申上げて、御前を下がつた。

### 見当のつかぬ組閣

内閣の組織は、私に取つて大変な仕事であつた。長いこと政局を離れていながら、一たいどういう人がどういう役目にいいのか、さっぱり見当がつかない。どうやらこうやらやりあげたが、今から考えても、それは実にえらい冒険をやつたものであつた。ちょうど吉田茂君が前の東久邇内閣の外務大臣だつたので、その官舎を借りて組閣本部にしたのだが、吉田君は組閣には関係がなかった。よく組閣参謀などというが私のときはそんな者は誰もいない、私自身が組閣参謀だつた。あとで檜橋渡君を呼んだら、彼はびっくりしてやって来

た。彼はフランスにいて、東京市の市債を円で拂うか、フランで拂うかという相当大きな問題を、弁護士として引受けていた関係から、法律家として相当の者だろうと思っていた。彼は内閣の一員でなく、法制局長官であった。岩田宙造君（司法大臣）も前から知っており、その人格も手腕も多少わかっていたが、引受けてくれるかどうか、見当がつかなかった。それが引受けてくれそうなので、これは工合が好いと思った。松本丞治君（国務大臣）の話はずっと後であった。松村謙三君（農林大臣）は同じ貴族院にいて、幾らか知っていた。芦田均君（厚生大臣）は外務畑の人だから、だいぶ前から知っていた。まあこんな工合に、全く予期だにできなかった私の組閣は、初めから準備も何もなかった。しかし一人話がつくと、例えば次田大三郎君が書記官長を引受けてくれると、その人の意見を聞いて、次の見当がつくという風に、結局全部の閣僚の人選が出来たわけである。

### あゝ八月十五日

戦後の混とんたる世相の中で、私の内閣の仕事は山ほどあった。中でも一番重要なものは新しい憲法を起草することであった。そしてその憲法の主眼は、世界に例のない戦争放棄、軍備全廃ということで、日本を再建するにはどうしてもこれで行かなければならぬという堅い決心であった。

これより前、私は長い浪人生活をしていて、あまり用事がないので、よく日本クラブへ出かけた。ちょうど昭和二十年八月十五日の終戦の日の朝も行っていた。すると事務員がやつて来て、今日正午に陛下の玉音放送がありますという。私は前もってポツダム宣言受諾の事など聞いていなか

ったので、何の放送ですかと訊くと、それは判りませんが、とにかくそういう予定だそうですね。二階の図書室に備付の受信機の側へ行くと、もう沢山の人が集まっている。時報が終ると、放送局のアナウンサーはこれより玉音の放送ですと告げた。一同期せずして起立した。この放送で、無条件降伏ということが判って、みな色を失った。放送が済んでも、黙って立っていて、一言も発する者が無い。隅の方に女の事務員が三、四人立っていたが、それがわあッと泣き出した。それで沈黙が破られ、みなハンケチを取り出して眼を拭いた。それは実に一生忘れられない、深く、感動であった。

### 聞け野人の声

もうクラブなどに居る気がしない、心中おう／＼として楽まない。家へ帰ろうと、クラブを出て電車に乗った。そしてその電車の中で、私は再び非常な感激の場面に出逢ったのであった。それは乗客の中に、三十代ぐらいの元気のいい男がいて、大きな声で、向側の乗客を呼びこよう叫んだのである。

「一たい君は、こうまで、日本が追いつめられたのを知っていたのか。なぜ戦争をしなければならなかったのか。おれは政府の発表したものを熱心に読んだが、なぜこんな大きな戦争をしななければならなかったのか、ちっとも判らない。戦争は勝った／＼で、敵をひどく叩きつけたとばかり思っていると、何だ、無条件降伏じゃないか。足も腰も立たぬほど負けたんじゃないか。おれたちは知らん間に戦争に引入れられて、知らん間に降参する。自分は目隠しをされて屠殺場に追



込まれる牛のような目に逢わされたのである。怪しからんのはわれわれを騙し討ちにした当局の連中だ」

と、盛んに怒鳴っていたが、しまいにはオイ／＼泣き出した。車内の群集もこれに呼応して、そうだ／＼と泣いてワイ／＼騒ぐ。

私はこの光景を見て、深く心を打たれた。彼らのいうことはもともと至極だと思った。彼らの憤慨するのにも無理はない。戦争はしても、それは国民全体の同意も納得も得ていない。国民は何も知らずに踊らされ、自分が戦争をしているのでなくて、軍人だけが戦争をしている。それをまるで芝居でも見るように、昨日も勝った、今日も勝ったと、面白半分に眺めていた。そういう精神分裂の揚句、今日惨たんたる破滅の淵に突き落されたのである。もちろんわれ／＼はこの苦難を克復して、日本の国家を再興しなければならぬが、それにつけてもわれ／＼の子孫をして、再びこのような、自らの意思でもない戦争の悲惨事を味わしめぬよう、政治の組立から改めなければならぬということを、私はその時深く感じたのであった。

日露戦争の時、私は外務省の役人をしていて、よく当時の実際を知っているが、あの時は本当に国民が政府と一緒に、あるいは軍隊と一緒に、戦争をしているという気持ちになっていた。その有様というものは、まあ日夜提灯行列とか、旗行列とかいうものが、何千人も外務省へやって来て、万歳々々という騒いだものだ。夜になると私たちの任務の一つは、玄関のところまで出て、その一行

に応答することであつた。その人たちの顔を見ると、みな満面に感動と喜悅とをたたえて、その事が自分らの已むに已まれぬ仕事のように見えた。ところが今度は違う。みな黙っている。こんどの戦争では、そんな行列が外務省へやって来なかつたと思う。それだけ国民の気持が違う。

### 軍備全廃の決意

私は図らずも内閣組織を命ぜられ、総理の職に就いたとき、すぐに私の頭に浮んだのは、あの電車の中の光景であつた。これは何とかしてあの野に叫ぶ国民の意思を実現すべく努めなくちゃいかんと、堅く決心したのであつた。それで憲法の中に、未永ごうそのような戦争をしないようにし、政治のやり方を変えることにした。つまり戦争を放棄し、軍備を全廃して、どこまでも民主主義に徹しなければならぬという事は、外の人は知らんが、私だけに關する限り、前に述べた信念からであつた。それは一種の魔力とでもいうか、見えざる力が私の頭を支配したのであつた。よくアメリカの人が日本へやって来て、こんどの新憲法というものは、日本人の意思に反して、総司令部の方から迫られたんじゃありませんかと聞かれるのだが、それは私の關する限りそうじゃない、決して誰からも強いられたんじゃないのである。

軍備に關しては、日本の立場からいえば、少しばかりの軍隊を持つことは、ほとんど意味がないのである。将校の任に當ってみれば幾らかでもその任務を効果的のものにしたいと考えるのは、それは当然の事であろう。外国と戦争をすれば必ず負けるに決まっているような劣弱な軍隊ならば、誰だつて真面目に軍人となつて身命を賭すような気にはならぬ。それでだんだんと深入りして、

立派な軍隊を捨てようとする。戦争の主な原因はそこにある。中途半端な、役にも立たない軍備を持つよりも、むしろ積極的に軍備を全廃し、戦争を放棄してしまおうのが、一番確実な方法だと思うのである。

も一つ、私の考えたことは、軍備などよりも強力なものは、国民の一致協力ということである。武器を持たない国民でも、それが一団となつて精神的に結束すれば、軍隊よりも強いのである。例えば現在マッカーサー元帥の占領軍が占領政策を行っている。日本の国民がそれに協力しようと努めているから、政治、経済、その他すべてが円滑に取り行われているのである。しかしもし国民すべてが彼らと協力しないという気持になったら、果してどうなるか。占領軍としては、不協力を捕えて、占領政策違反として、これを殺すことが出来る。しかし八千万人という人間を全部殺すことは、何と申して出来ない。数が物を言う。事実上不可能である。だから国民各自が、一つの信念、自分は正しいという気持で進むならば、徒手空拳でも恐れることはないのだ。暴漢が来て私の手をねじって、おれに従えといつても、嫌だといつて従わなければ、最後の手段は殺すばかりである。だから日本の生きる道は、軍備よりも何よりも、正義の本道を辿つて、天下の公論に訴える、これ以外にはないと思う。

あるイギリス人の書いた「コンディションズ・オブ・ピース」(講和条件)という本を私は読んでことがあるが、その中にこういうことが書いてあった。第一次世界大戦の際、イギリスの兵隊が

ドイツに侵入した。その時のやり方からして、その著者は、向うが本当の非協力主義というものでやって来たなら、何も出来るものじゃないという真理を悟った。それを司令官にいったということである。私はこれを読んで深く感じたのであるが、日本においても、生きるか殺されるかという問題になると、今の戦争のやり方で行けば、たとえ兵隊を持っていても、殺されるときは殺される。しかも多くの武力を持つことは、財政を破綻させ、従つてわれわれは飯が食えなくなるのであるから、むしろ手に一兵をも持たない方が、かえって安心なことになるのである。日本の行く道はこの外にない。僅かばかりの兵隊を持つよりも、むしろ軍備を全廃すべきだという不動の信念に、私は達したのである。

### 難航した憲法の起草

いよ／＼憲法草案の審議に取りかかると、ある規定のごときは少し進み過ぎて、世の非難を受けるだろうという多少の心配もあった。起草に関係した人たちは二晩も徹夜したことがあり、相当難航を続けたこともあり、戦争の放棄ということもその一つであった。また憲法草案については、その文句だとか、書き方など、専門的問題については、起草関係者が総司令部と連絡しておつたが、これも相当議論があった。

新憲法において、天皇は日本の象徴であるといつて、「象徴」という字を用いた。私もこれはすこぶる適切な言葉だと思つた。象徴ということとは、イギリスのスタチュート・オブ・ウェストミンスターという法律、これは連邦制度になってからだから、そう古い法律じゃない。その法律の中



に、キングは英連邦（ブリティッシュ・コンモンウェルス・オブ・ネーションズ）すなわちカナダやオーストラリアや南アフリカなどの国の主権の象徴（シンボル）であると書いてある。それから得たヒントであった。

☆

☆

☆

本篇、公人としての私の回顧の記録は、ここで一応打切ることとする。それは前に述べたように、昭和二十年に隠棲の宿志を果たすことが出来ず、引続き現在に至るまで、公人生活を続けているが回顧談としては余りに生々しいので、それは後の機会に譲ることとし、以下本文に漏れた教篇を、余談として追加する。

## 第二部 回想の人物・時代

幣原喜重郎略年譜

明治五年 大阪府に生る。

明治廿八年 東京帝国大学英法科卒業。

明治廿九年 外務省に入る、領事館補、仁川在勤。

明治卅二年 ロンドン在勤。

明治卅三年 領事、アンヴェルス在勤。

明治卅四年 釜山在勤。

明治卅八年 外務書記官、大臣官房電信課長。

明治四十一年 大臣官房取調課長、條約改正準備委員。

明治四十四年 外務省取調局長。

明治四十五年 大使館参事官、米国在勤。

大正二年 英国在勤。

大正四年 外務次官。



- 大正八年 特命全權大使、米國駐劄。
- 大正九年 男爵を授けらる。
- 大正十年 ワシントン軍縮會議に全權委員として出席。
- 大正十三年 外務大臣(第一次加藤内閣)
- 大正十四年 外務大臣(第二次加藤内閣)
- 大正十五年 外務大臣(第一次若槻内閣) 貴族院議員に勅任。
- 昭和四年 外務大臣(浜口内閣)
- 昭和五年 浜口首相奇禍のため内閣総理大臣臨時代理となる。
- 昭和六年 外務大臣(第二次若槻内閣)
- 昭和廿一年 東久邇内閣総辭職の後を受け内閣を組織す。
- 昭和廿二年 國務大臣兼復員庁總裁(第一次吉田内閣)
- 昭和廿四年 大阪府より衆議院議員に選出、進歩党總裁、のち民主党名誉總裁、自由党に合體後同党最高顧問。
- 昭和廿六年 衆議院議長に選任。
- 三月十日、狭心症のため急逝。

# 外交五十年

(禁無断転載)

昭和二十六年四月一日印刷  
 昭和二十六年四月十日発行

定価 二二〇円

著者 幣原喜重郎

発行者 高木健夫

印刷所 旭印刷株式会社  
 東京都新宿区西五軒町三二

発行所 読売新聞社  
 東京都千代田区有楽町一の一三

1917